

みんぱく 私の逸品 ファイアの羽根

標本番号 K0001722
地域 ニューシランド
受入年 1975年

民博 民族社会研究部 ピーター・マシウス

今から一〇年ほど前、ワンガヌイ地域博物館の
マオリ学芸員フラベル氏と一緒に私が収蔵庫で資
料を調べていた日のことである。ガラス蓋^{ふた}つきの小
さなケースに収められた鳥の羽根を見つけた彼は、
一目見るなり、これは極めて珍しい宝物だよといっ
て、その鳥に捧げる祈りの歌を小声で唱え始めた。
それはマオリ文化にとって重要な鳥ファイア（ホオ
ダレムクドリ）の尾羽根だった。白と黒の美しい尾
羽根が髪飾りに使われていたことは、一九世紀の
古写真や絵画にも描かれている。

ウェリントン北方の荒山にのみ生息していたファイアは、
二〇世紀初めには絶滅してしまった。ヨーロッパ式の銃を手に
してから、マオリの人びとが羽根を手に入れるのが容易になったし、

他国の博物館向け収集家たちもこの鳥をたくさん殺したからである。実
際、ファイアはだまされやすい鳥だった。ファイア、ファイアという鳴き声を人が口笛でま
ねると、仲間と勘違いして近づいてくるファイアを容易に捕まえることができたのだ。

マオリの人びとはファイアの羽根を珍重し、彫刻を施した特別な保管箱ワカ・ファイアに収めてきた。
その後、ワカ・ファイアは宝物箱一般をさすようになったが、現代の作家によるものは、みんなくのオセ
アニア展示で見ることができる。

収蔵庫のファイアの羽根は、一九〇四年にニュージーランドで収集され、その後、旧東京大学理学部文
化人類学教室を経て、みんぱく創設時に移管されたようだが、その最初の収集状況は詳^{まひ}らかではない。
ケース越しによく見ると、かなり劣化してポロボロになっているが、今でも元の形や色を確認でき
る。綿枕の上に眠るファイアの羽根は、失われた世界、銃導入前の時代を思い起こさせると同時に、マオ
リの人びとが生き続けていること、彼らが今でもファイアの魂を身近なものと感じていることを思い出
させてくれる。

